

ガウディ研究、サグラダ・ファミリア聖堂計画案の変遷III

—平面計画の変遷—

Gaudí, sus proyectos del Templo de la Sagrada Familia III —Plantas del Templo—

鳥居徳敏 TORII, Tokutoshi

要約

ガウディの未完の聖堂として知られるサグラダ・ファミリア。その聖堂の「計画案をガウディは残さなかった」と言われ、それを鵜呑みにして疑わない人がいかに多いことか。しかし、建築は建築家一人の作品ではなく、オーナーから職人に至るまで実に多くの人々の協力を必要とする。つまり、多人数が同時に働く建設では計画なくして工事は不可能であり、計画案は常に存在すると考えなければならない。最初の建立提案時には、オーナーに相当する創設者ブカベリヤのロレート計画案があり、建設地獲得後の初代建築家ビリヤールはバルセロナ大聖堂を基礎としたプランで着工し、敷地条件に合わせたネオ・ゴシック案への変更を模索する。2代目建築家ガウディは、前任者の建設を白紙に戻すことは不可能であり、既存の計画に従わざるを得ない。ただし、西欧の大聖堂の建設ではローマのサン・ピエトロやジローナ大聖堂などの例に見られるように初期計画案は頻繁に変更されてきたし、それが可能な建設方式でもあった。ガウディ最初の変更案は着任1年5か月後（1885）のことであり、バルセロナ大聖堂を範にしながらも、自らの聖堂理念を反映させるものであった。1890年代初め巨額の献金を受け「降誕の正面」の建設が可能になった。これは翼廊の幅を倍増するもので、計画案の変更を意味し、ギリシャ十字の集中式プランになった。そして1902年、市当局との合意に基づき前面隣接地へ聖堂を拡張し、マリョルカ大聖堂の規模に相当するラテン十字の5廊式バシリカ案に変更する。その後、背面隣接地への拡張も模索され、1910年のパリでのガウディ展ではその拡張プランが展示されるものの、

市との合意に至ることなく、現在知られる最終案に落ち着く。以上、聖堂の計画案は常に存在し、大きな変更が繰り返され今日の最終案になったことを明確にする。

RESUMEN

El Templo de la Sagrada Familia es conocido como templo inacabado pues se dice que Gaudí dejó el proyecto sin finalizar, y así lo cree la mucha gente. Sin embargo, una obra de arquitectura no puede ser el trabajo de un solo arquitecto, sino el resultado de la colaboración de muchos, incluidos el propietario y los obreros. De este modo, a la hora de realizar una obra, siempre se debe pensar que existe un proyecto fijo, pues de lo contrario sería imposible de llevar a cabo. Respecto a la planta del Templo de la Sagrada Familia, en un principio existía el proyecto de su fundador Bocabella. Después de conseguir el terreno actual, su primer arquitecto, Villar, empezó la construcción del mismo sobre una planta basada en la de la Catedral de Barcelona, e intentó adaptarla a la inclinación del terreno. Gaudí, como arquitecto sucesor, no podía rehacer la obra, sino que se vio obligado a continuarla. No obstante, existen precedentes de cambios en la construcción en los grandes templos cristianos, pues en ellos no era raro que se modificara el proyecto inicial con el paso del tiempo, como ocurrió en el caso de San Pedro de Roma, la Catedral de Girona, etc., y es que el modo de construirlos posibilitaba este tipo de transformaciones. El primer proyecto de Gaudí (1885), hecho un año y 5 meses después de ser nombrado arquitecto sucesor de Villar, estaba basado también en la planta de la Catedral de Barcelona, y al mismo tiempo, reflejaba en él su idea de templo cristiano. Al principio de la década de 1890, un cuantioso legado permitió la construcción de la Fachada del Nacimiento, lo que significaba ampliar doblemente la anchura del crucero de tres naves. Esta ampliación, debido a las condiciones del terreno, exigía una planta concentrada de cruz griega y una composición piramidal, idea que aparece manifestada en los Apuntes de Reus. En 1902, reflexionando sobre la Catedral de Mallorca y “previo el asentimiento de las autoridades”, Gaudí amplió la planta

transformándola en otra de cruz latina con cinco naves, y trasladó la escalinata principal a la manzana inmediata por medio de un puente situado encima de la calle. Tiempo después, pensó ampliarla nuevamente añadiéndole la manzana posterior, tal como se aprecia en la planta del Templo expuesta en la Exposición de Gaudí en París (1910); sin embargo, esa ampliación no se pudo llevar a cabo, según parece, por falta de acuerdo con las autoridades, por tanto, es preciso olvidarla. Y así, llega a nosotros la planta que se puede considerar como definitiva de Gaudí. Con lo cual podemos decir que existe siempre la planta del Templo y que la definitiva es la última solución, resultado de las anteriores.

はじめに

前稿Ⅱではガウディによる聖堂「平面図最終案」を扱った¹。本稿ではブカベリヤによる聖堂初期案からこの最終案に至る平面計画の変遷をテーマとする。これまでにも聖堂計画案の変遷を検討するなかで平面計画にも触れてきた²。しかし、それらは部分的であり、平面計画をテーマとしたモノグラフは存在しない。特に、1990年にガウディが初めて作成したと想定できる聖堂平面図(1885)が発見されている以上、これを踏まえた平面構成の変遷を再検討する必要がある³。

本稿でも視覚情報と文字情報の収集をベースに、平面計画の変遷を総合的に再検討することとする。計画案の変遷を明らかにすることにより、今後の計画案作成の指針になると思うからである。

¹ 拙論「ガウディ研究、サグラダ・ファミリア聖堂計画案の変遷Ⅰ—外観図の分析—」、『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』(スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会)、第13号(2012年4月)、13-24頁、および「(同上)Ⅱ—平面図最終案—」、同上第14号(2013年4月)掲載予定

² 拙書 *El mundo enigmático de Gaudí*, Madrid; Instituto de España, 1983, pp.133-41, 297-98

³ Bassegoda, N.: “El primer projecte de Gaudí per a la Sagrada Família”, *Temple* (Barcelona, novembre - desembre 1991), Any 125, pp.11-13. および次書に掲載 *L'Estudi de Gaudí, Selecció d'articles publicats a la revista TEMPLE entre 1971 i 1994*, Barcelona; Temple Expiatori de la Sagrada Família, pp.207-09

1. ブカベリヤ Josep Maria Bocabella (1815-92) の聖堂提案、1874 年

本論文第1稿で述べたように、創設者ブカベリヤによる聖堂建立の初提案は1874年になされ、翌75年に詳細が明らかにされた⁴。これによると、聖堂はロレート(伊)のバシリカのイミテーションであり、その平面規模は長さ95×幅69m(壁厚含まず)であった。この提案は未だ建設地の入手前のことであり、現在の敷地(約17,000㎡)を購入するのは1881年12月のことである⁵。この敷地が聖堂の規模に合わされて購入されたことは図1を見れば明らかであろう。

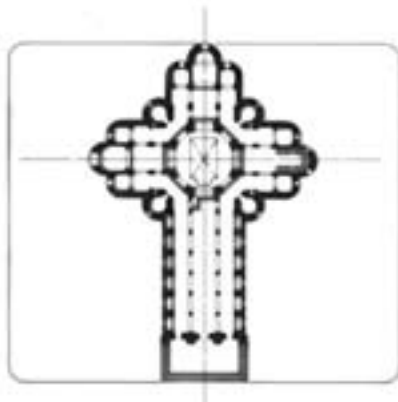


図1 ブカベリヤ、ロレートのレプリカ案

聖堂は3廊式のラテン十字プランであり、交差部にナザレのサグラダ・ファミリア(聖家族)の家サンタ・カザ(聖家)を祭る。ブカベリヤの提案はこのサンタ・カザのコピーを御本尊として祭るものであった。また、主祭壇を含めその左右に11個のサン・ホセに捧げた祭室の設置も提案する。現在のロレート・バシリカの前には広場があるように、本聖堂にも広場が必要であろうし、また、聖堂一般の床面が公道面より相当高くなっているように、その広場には公道からの階段も必要となろう。ただし、購入した建設地は傾斜しており、聖堂背面のプロベンサ通り側と大正面側のマリョルカ通り側では5m程の差がある。この高低差をクリアするには大階段を必要とするのだが、建設地購入時にはこの問題が等閑視されていたようだ。

⁴ Rodríguez, José María: “XXXI Carta de nuestro Rmo. P. Director ----, Los imágenes de San José”, *El Propagador de la Devoción a San José* (Barcelona, abril 1874. 以下 *El Pro* と略す), Año 8, Nº5, pp. 130-35 / “XX Un templo dedicado a la Sagrada Familia”, *El Pro* (febrero 1875), Año 9, Nº3, pp.84-87 / “El templo de la Sagrada Familia”, *El Pro* (junio 1875), Año 9, Nº7, pp.215-16 / “El templo de la Sagrada Familia”, *El Pro* (septiembre 1875), Año 9, Nº10, pp.310-11

⁵ “¡Te Deum Laudamus!!!”, *El Pro* (noviembre 1881), Año 15, Nº12, pp.366-68

2. 初代建築家ビリャール Francisco de P. Villar y Lozano (1828-1903) 案

ガウディの生前、初代建築家ビリャールによる平面図は一度として公表されなかった。しかし、聖堂が所蔵する3種類の平面図の他、最初のガウディ研究書(ラフルス著)に掲載された平面図⁶(図2の③)の計4種類が現在知られている。これら平面図は建設地購入から聖堂が着工された翌年の初代建築家辞任までの間、すなわち1881-83年に作成されたものと推測される。

図2の①案のみが5廊式バシリカで、広大な交差部を持ち、そこには聖家族の家が設置できそうであり、また放射状祭室7個の他、側廊側に2個ずつ、合計11個の祭室も用意され、ブカベーリャの計画に合致する。中庭を囲む回廊も併設された本案は敷地規模を踏まえた最初の計画案であろう、と推定できる。なぜなら、聖堂前の広場も階段も考慮されておらず、この敷地条件に合致しないから、ごく初期の案であろうと推測できるからである。図2の②-④案は、いずれも3廊式のラテン十字プランである。違いは身廊部が②③案の5ベイ(間)構成であるか、それとも④案の4ベイ(間)構成であるかにある。聖堂頭部は建設されたものと同規模・同形状であるから、この部分を敷地内の建設場所に固定すると5

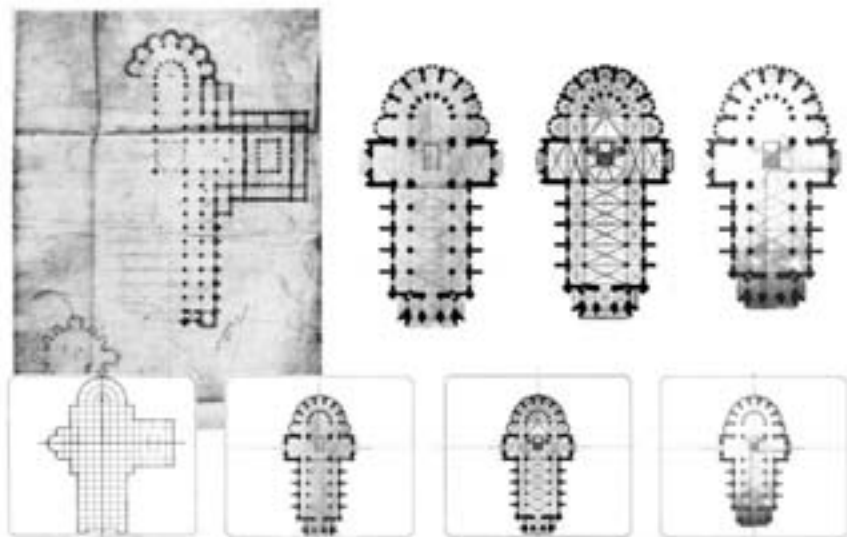


図2 初代建築家ビリャール、聖堂平面図(左から①②③④案) 1881-83

⁶ Ráfols, José F.: *Gaudí*, Barcelona; Editorial Canosa, 1929, p.42

ベイ構成の②③案では大正面側がほぼ敷地境界線に達し、聖堂前に広場スペースを用意することができない。したがって、現敷地内で実現可能な聖堂平面は④案の4ベイ構成しかあり得ず、ビリヤールの最終案はこの案であったであろう、と推測される。その傍証が本論文第1稿で扱った聖堂立面図である。機関誌に掲載された立面図では僅か3ベイしか存在しないものの、現存する立面図は4ベイ構成の身廊で描かれ、5ベイ案の立面図が存在しない。また、着工時（1882年3月）に機関紙に公表された聖堂規模は、正面幅44×長さ97m、鐘塔の高さ85mであった⁷。この正面幅に対応する平面図も立面図も知られていない。幅44mは地下^ク祭室（地下礼拝堂）の内法幅にだけ一致する。長さ97mは機関誌に記載されたロレートの内法長さ95mに対応し、ビリヤールの平面図④案、すなわち4ベイ構成の前廊を含む長さに相当する。5ベイ構成の②案ではさらに10mほど長くなる。

ビリヤールは建築学校の教授であり、かつバルセロナ司教区の建築家であった。すなわち、大聖堂の建築家でもあった。このバルセロナ大聖堂（1298年着工）の平面形状と規模とがビリヤールの5ベイ案と酷似するのである（図3）。前者身廊部の4ベイを5ベイに分割すれば、後者の1ベイの長さに等しくなる。また、

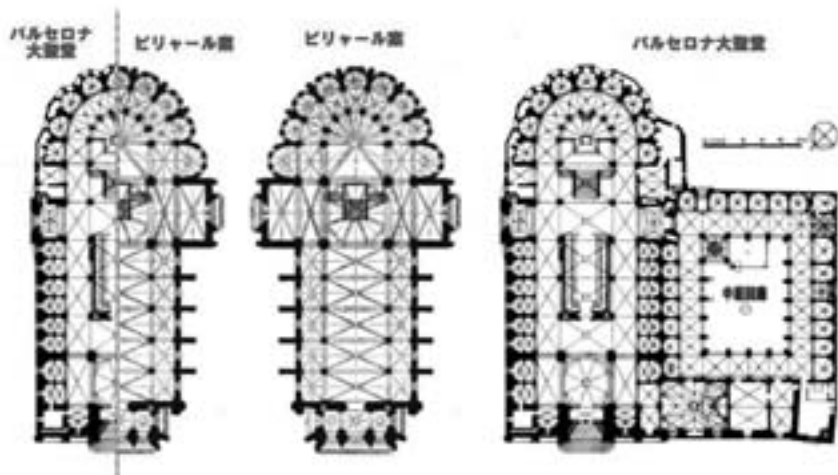


図3 バルセロナ大聖堂とビリヤール案（身廊部5ベイ構成）との比較

⁷ “El Templo Expiatorio de la Sagrada Familia”, *El Pro* (abril 1882), Año 16, Nº5, pp.144-56

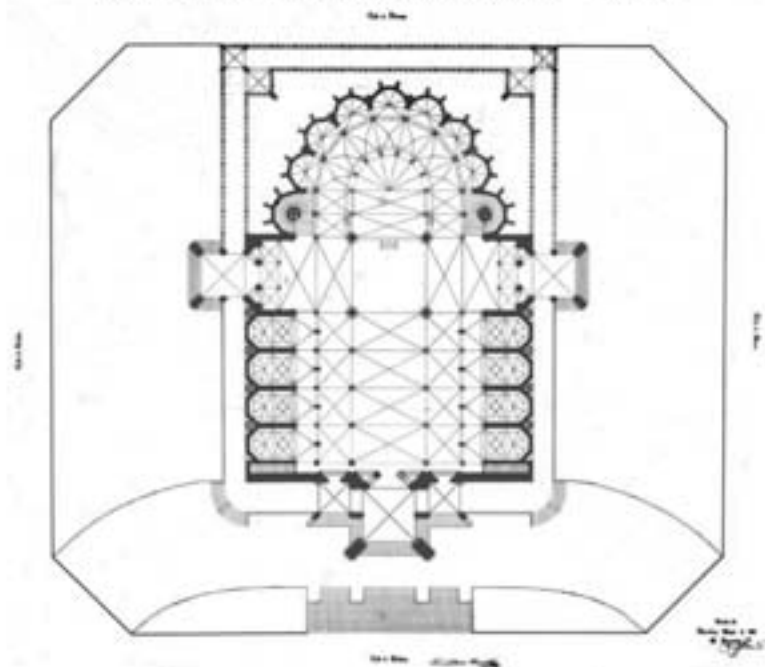
聖堂頭部から翼廊部までの長さもほぼ等しい。聖堂頭部の放射状祭室の形状と規模も酷似し、祭室数9個も同じである。ただ、ブカベーリヤの11祭室案には2個不足する。また、中庭回廊に関してはピリャールの初期案にだけ存在した。しかし、大聖堂との決定的な酷似は内陣前の階段にある。中央の大階段は内陣に昇るのではなく、地下に降りる。内陣には両サイドの小階段で昇る。この大聖堂は877年以来バルセロナの守護聖人サンタ・エウラリアに捧げられており、その石棺が内陣下部の地下祭室に祭られている。内陣前の大階段はこの重要な祭室に導く階段なのだ。同様にピリャール案でも大階段は内陣下の地下祭室(地下礼拝堂)に導き、そこに聖家族の家を祭るように計画変更された。したがって、この5ベイ案の聖堂平面はバルセロナ大聖堂に忠実に従ったものであり、敷地条件から4ベイ案に変更された、と結論できるであろう。

3. 1885年ガウディ平面図

1990年、前記したように1885年に作成されたガウディの聖堂平面図(図4)が発見された。当時、聖堂の建つ地区サン・マルティ・ダ・プルバンサルス San Martí de Provençals は独立した自治体(市町村)を形成しており、バルセロナ市に編入されるのは1897年のことであった。したがって、聖堂の建築許可は後者でなく前者に申請され、それに添付された平面図はバルセロナ市ではなく、マン・マルティ地区の古公文書館で保管されていた。前者古公文書館での調査はバセゴダにより1960年代後半になされていたのだが、後者は新たに開設され保管所であり、それにともない図面の発見に至った。

このガウディ署名入りの平面図は着工3年後の「1885年3月」の日付を持つ。縮尺は1/100、敷地は縦(聖堂頭部側プロベンサ《プルバンサ》通りから大正面側マヨルカ通りまで)114m×横(「受難」側サルデーニャ通りから「降誕」側マリーナ通りまで)130m、4隅の斜辺は約21m。この寸法は現在の敷地114.564×131.254mにほぼ一致するから、正確な図面と判断される。この正確さは敷地条件に合わせ、大正面前に大階段とコーナー部からの斜路を設け、聖堂前広場を新設していることにも現れている。ピリャールの身廊部5ベイ案と4ベイ案との比較図でも明らかのように、後者4ベイ案ですら、聖堂前に大階段を設置することが難しい。この解決策としてガウディは翼廊の幅と身廊部のベイ(間)

TEMPLO DE LA SAGRADA FAMILIA *plan geral*



TEMPLO DE LA SAGRADA FAMILIA *plan geral*

TEMPLO DE LA SAGRADA FAMILIA *plan geral*

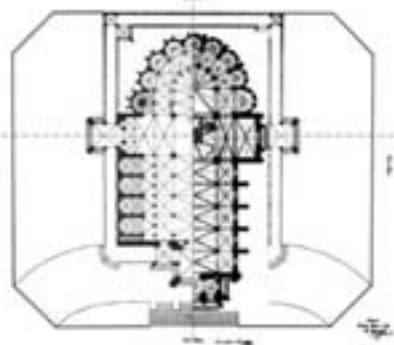
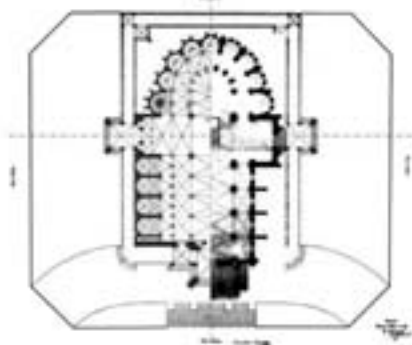


図 4 ガウディ平面図 1885、およびピリヤール案との比較

寸法を縮小しているのである。

第2の設計変更は内陣前の大階段を廃止し、翼廊に接する両側の祭室にラセン階段を設け、地下礼拝堂のみならず、聖堂上部にも通じる階段塔にしたことである。第3の変更は側廊外周壁に沿っての祭室群の新設。これはピリャール案の擁壁間に祭室を設けることになり、カタルーニャ・ゴシック聖堂に見られる伝統的手法であった。バルセロナ大聖堂もこの伝統に従い、ガウディの祭室に形状もヴォールト天井も類似する(図5)。ガウディの場合、祭室群前のアーケードに中柱を挿入し、身廊部側と祭室側とで空間分割を図り、祭室群前に専用通路を生み出す。これは前例のない独創的な解決策であろう。

第4の変更は聖堂を取り囲む回廊の新設である。この回廊については「行列用回廊」としてガウディはその設置を自筆原稿「装飾に関する覚書」(1878-79)で以下のように推奨している。

「特に後陣〔聖堂頭部〕周辺に配された行列用回廊は聖域、つまり崇める場所を〔世俗の世界から〕隔離するのに極めて有効であり、礼拝の慣習にも合致する」⁸

この推奨通り、回廊が聖堂頭部を取り囲み喧騒な俗世界から隔離する。身廊部を取り囲むのは単なる通路であり、構築物ではない。ただし、後者も祝祭時には行列行進に供することができよう。この行列行進とはキリスト教の典礼での行列行進を指し、したがって、「礼拝の慣習にも合致する」ことにもなる。

また、ピリャール案同様、この変更案でも大正面前に前廊が形成され、主身廊

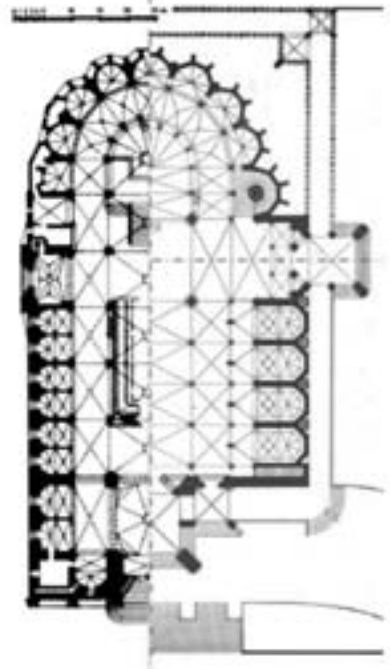


図5 バルセロナ大聖堂と
ガウディ案(1885)との比較

⁸ ガウディの自筆ノート Cuaderno de Reus (Apuntes de Reus), 第26葉表面。現在は2008年に創設されたレウス市立「ガウディ・センター El Gaudí Centre」が所蔵・陳列する。拙書『建築家ガウディ全語録』中央公論美術出版、2007, p.207

への扉口には大きな玄関ポーチが作られる。頑強な隅柱の存在から、鐘塔の下部構造であろうと推測される。同様の玄関ポーチが翼廊両端のファサード前にも存在することから、ピリャール案にはない鐘塔がここにも推測される。交差部にはヴォールト天井を示す斜線のないことから、初代建築家の計画案同様、採光塔の存在が推測される。また、側廊の祭室間外壁には小さなラセン階段が多数挿入されていることから、ここにも小塔の存在が推測される。聖堂頭部の翼廊側の両サイドの階段も塔を形成するであろうことから、このガウディ初の聖堂変更案は塔群を特徴とする外観構成であったと推測される。したがって、この最初期から将来の聖堂外観の萌芽が見られると判断されるであろう。

4. ガウディの聖堂計画案第2案

1892年巨額の献金を受け「降誕の正面」が着工された⁹。翌1893年になされたこのファサードの建設工事に関する報告のなかに、次のような情報が初公表される。

「1893年に実施されたもっとも重要な工事は、翼廊の（聖堂頭部を背にして）左側躯体の基礎工事であった。この躯体は北東を向く先端部であり、先述したよ

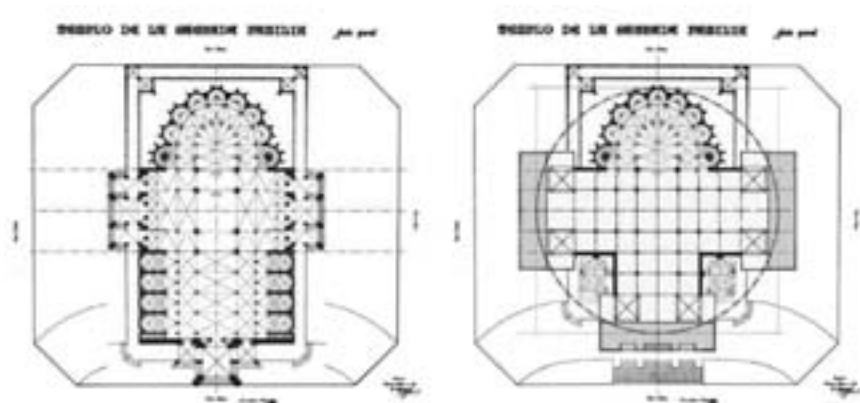


図6 1890年代初めの推定聖堂プラン：（左側）翼廊幅30mへの変更案、（右側）ギリシャ十字形案、各ファサード前に奥行10mの広場を設置

⁹ 拙論「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂の財政、および財政問題が同聖堂とガウディに与えた影響に関する考察」、『建築史学』（建築史学会、1993年3月）、第20号、pp.54-89

うに、聖堂では一般的な十字形プランの翼廊左側の最先端部に位置する。交差点中心から同翼部外側までは40 m。この寸法にはその前に続く広場の奥行き10 mは含まれていない。一方から他方の端、つまりファサードの幅は42 mあり、隣接する階段躯体から18 mの位置に左側躯体（＝ファサード）が形成される。この躯体は2分割され、内部側は聖堂の一部となり、外側はファサード自体を形成する」¹⁰

この記述から、翼廊の長さ80 mが導かれ、ファサードの幅42 mは建設された正面幅にほぼ等しいことから、翼廊も建設されたものと同じ3廊式の幅30 mであろうと推測される。すなわち、翼廊規模は、ビリヤール案の17×50 m、およびガウディの1885年案の14.6×55.8 mに対し、30×80 mに拡大したことを意味する。この設計変更は、ビリヤール案のところで既述した敷地条件と聖堂全長との問題を再燃させる。翼廊の長さ80 m、および両端部前の奥行き10 mの広場との合計100 mは敷地に余裕があり、問題はない。しかし、翼廊幅の30 mは聖堂の長さに影響を与え、大正面前の大階段設置を不可能にさせる。これを解決するには身廊部の長さを翼廊の長さにまで短縮するしかない。すなわち、ラテン十字から集中式のギリシャ十字の聖堂プランにせざるを得ない（図6）。

このギリシャ十字プランの推測は、単なる推定ではなく、1903年1月のフランスの雑誌に掲載され、翌月にはバルセロナの雑誌に再録された論稿に記載された文字情報にも基づく。

「教会堂（＝サグラダ・ファミリア聖堂）は、高い円柱で分割された等高式3廊式のカタルーニャ方式になろう。いかなる場所からもクーポラが見られるようギリシャ十字の形態をとろう。夜空に輝く灯台のようにガラス球を頂く極めて高い採光塔（＝クーポラ）を中心としたピラミッド構成になろう。中央（採光）塔は4人の聖書作家に捧げられた4小塔に取り囲まれる。12鐘塔は12使徒に捧げられ、建物の周りに配される」¹¹

この著者デダヴィーズ・デュ・デゼル Desdevises du Désert（1854-1942）はフ

¹⁰“Las obras del Templo Expiatorio de la Sagrada Familia”, *El Pro* (1 febrero 1882), Año 28, N°3, p.69

¹¹ Desdevises du Désert, (Georges): “L’art religieux en Espagne, Beauté chrétienne”, *L’art et l’autel* (Paris, janvier 1903); “La obra de Gaudí juzgada por un estrajero”, *Pèl & Ploma* (Barcelona, febrer 1903), Vol.IV, N°90, pp.53-55

ランスのクレルモン＝フェラン大学教授で、スペイン史を専攻し、その調査活動にバルセロナを頻繁に訪れる学者であった。当時、聖堂計画は公表されておらず、したがって、引用文の内容はガウディとの会見で得られた情報としか考えられない。ただし、会見時期は上記論稿が発表されるかなり以前であったであろうと推測される。なぜなら、後述するように、この1902-03年にかけて、ガウディは最終案に近い案に変更しているからである。

引用文内の「カタルーニャ方式」とはカタルーニャ地方の中世ゴシックに典型的な教会堂の形式を指す。その特徴は、バルセロナ大聖堂や同市サンタ・マリア・ダル・マル教会堂のように、主身廊と側廊の天井高がほぼ等しい等高式と、側廊外壁の擁壁間への祭室設置に見られる。この傾向は1885年の平面図でも読み取れる特徴であった。次の「ギリシャ十字」はサグラダ・ファミリアの計画史のなかでは初出だが、ガウディのレウス覚書に記された聖堂理念の「ピラミッド形」と「集中式プラン」に合致する¹²。そして、聖書作家4人の4塔と12使徒の12鐘塔はガウディ聖堂の最大特色になるものであろう。したがって、引用文の内容は極めて信憑性の高い情報と判断される。

本聖堂の特色となる12使徒に捧げた12鐘塔は、しかし、1885年の平面図ではその兆候すら見られない。また、先述した1893年度の工事報告書にも鐘塔に関する記述は見られない。もっとも鐘塔はファサードの上方に突出する部分であることから、基礎工事の報告には含まれていないに過ぎないと思うかも知れない。しかし、この「降誕の正面」は4基の鐘塔を構造体として形成されていることを考えると、基礎工事とは鐘塔の基礎工事にも相当することを忘れてはならない。それ故、翌1894年度の工事報告書には下記の記述が見られる。

「----- この（1993年度の）基礎工事に続き1894年度の工事が継続された。外側の支持躯体と、聖堂を取り囲むことになる行列用回廊との接合部に相当する鐘塔（複数形）の端部とを補充する目的で、同基礎の拡張がなされた。---（中略）--- 外側の4支持躯体から内側の4支持躯体までに2つの部屋もしくはホールがあり、それらの壁は、各室1つずつの計6ヴォールトで覆われる天井同様、ピリャフランカ産の大きな切石で建設された。これらのヴォールトのうち4個は、4鐘

¹² 注8のガウディの自筆ノート、第20-22葉。拙書-2007, pp.204-07

塔のそれぞれの中央に位置する半径 1.5 m のリング状開口部を持つ。これら開口部は同鐘塔の建設資材を上げるためであり、将来は、鐘を内部から吊り上げる目的を持つ¹³ (傍点は訳者による強調)

本工事報告で「降誕の正面」が 4 基の鐘塔を持つことが初公表された。すなわち、3 つのファサードで計 12 鐘塔が推測される。正方形プランのこれら鐘塔は聖堂軸に対し平行ではなく、対角線状に配される (図 7)。したがって、各角部はファサードに対し外側、内側、および端部側に突出する。「外側の支持躯体」と「鐘塔 (複数形) の端部」は各方形の角部を意味し、後者に関しては 4 鐘塔を

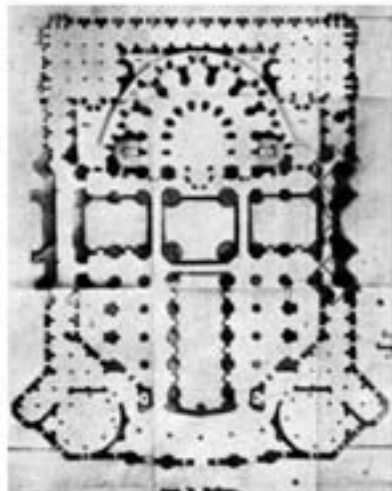


図 7 聖堂地下平面図 (1916)
「降誕の正面」側の 4 個の矩形は
4 鐘塔の位置を示す

集合体と見なした場合の端部に相当する。当然ながら、「外側の 4 支持躯体」と「内側の 4 支持躯体」も同角部を意味する。重要なことは、これらの支持躯体が 4 鐘塔の基礎部分に当ることである。つまり、これら基礎がなければ鐘塔を支える基盤がなく、したがって、現在の 4 鐘塔は存在することはない。この重要な基礎部を拡張工事として追加したことは、ファサード着工時には 4 鐘塔の計画は存在せず、その後の設計変更によるものであったことを意味しよう。

しかしながら、「降誕の正面」と同ファサードの 4 鐘塔は構造的に一体化していることを考慮するなら、4 鐘塔への設計変更は同ファサード着工とほぼ同時期になされたと考えるべきであろう。この設計変更直後の立面図が 1926 年に初公表された背面図 (図 8) であろう。なぜなら、翼廊の長さが 80 m あり、大正面側の鐘塔が 4 基存在し、しかも、それらの位置から翼廊と同じく 3 廊式の身廊部が推測されるからである。この場合、翼廊両端の鐘塔も 4 基ずつ存在すると推測される。なぜなら、鐘塔の先端には鳥、おそらく鳩が描かれており、十字架 (聖

¹³ “Las obras del Templo Expiatorio de la Sagrada Familia”, *El Pro* (Barcelona, 1 enero 1895), Año 29, N°1, pp.9-14

堂平面のギリシア十字を意味する) 上の 12 羽の鳩は 12 使徒を象徴すると考えられるからである。

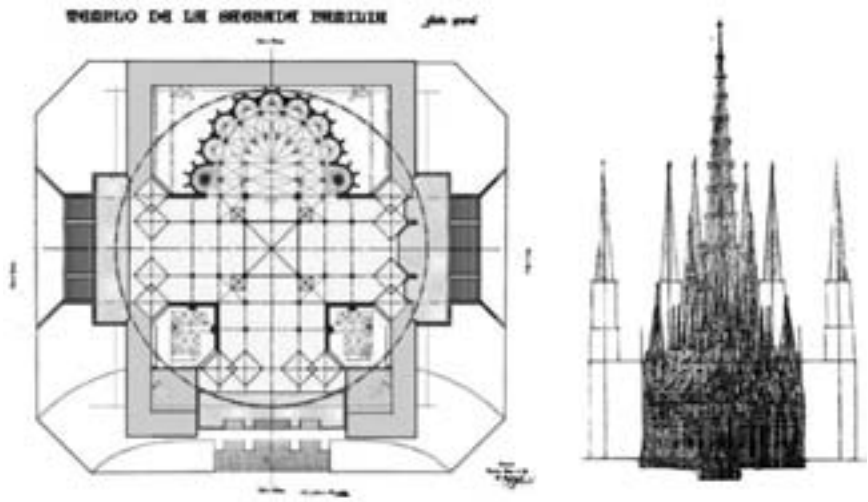


図 8 ギリシャ十字の聖堂プランと同時期の背面図

5. 1902 年ラテン十字形プランへの設計変更

1903 年 1 月、以下の報道がなされる。

「地下礼拝堂の簡略な記述、および掲載写真に見られる現在の建設状況の外観により、庭園やカトリックの学校と工房で取り囲まれることになる聖堂の壮大さが推測されよう。このために 15,520 m²の敷地が用意され、そのなかで、聖堂は正面幅 57 m×奥行 97 mの空間を占める。しかしながら、聖堂の収容人数を増やすことが真に作品の壮大さにより一層ふさわしいことを考慮し、当局との合意の上、予測される諸問題を克服し、規模の拡張が考えられた。すなわち、マリョルカ通りに陸橋を架け、それを介して隣接街区へ建設を拡大することである」¹⁴ (傍

¹⁴ “Templo de la Sagrada Familia”, *La Hormiga de Oro* (Barcelona, 24 enero 1903), Vol.20, N°4, 無頁。引用文内の「当局との合意の上」は実際になされていたようで、1911 年に発表されたジョセリー計画案 (*La Il·lustració Catalana*, Any IX, N°395, Barcelona, 1 janer 1911, « Progente d'enllasos de Barcelona ab els pbles agregats, per l'arquitecte Lleó Jausseley ») や 1916 年市当局作成の新計画案 (注 24 参照) などに見られるように、聖堂前の街区に大階段用の敷地が描かれている。

点は訳者による強調)

隣接街区への工事の拡大は、聖堂前の広場や大階段を隣接街区側に移動することを意味する(図9)。これにより聖堂の身廊部の拡張を可能にすることができる。この辺の事情を明らかにする文字情報は1926年に出現する。

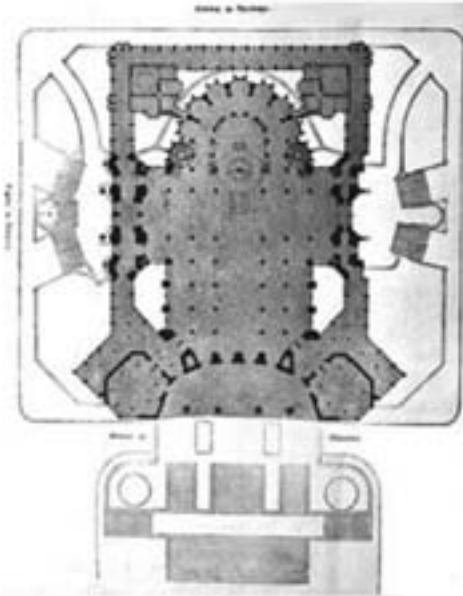


図9 サグラダ・ファミリア聖堂平面図(1917年初公表)

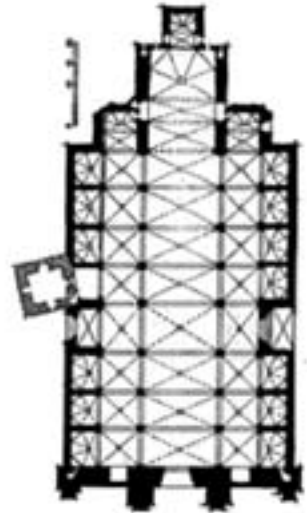


図10 マリョルカ大聖堂平面図

「マリョルカ司教カンピンス博士が依頼した大聖堂の修復は、直ちに、彼(ガウディ)にラテン十字のバシリカ平面の聖堂計画へと導いた。その縦断面に描かれた5身廊は大正面の5秘跡(に捧げられた)扉口に対応し(残りの2秘跡も隣接するが、しかし聖堂から洗礼室と懺悔室に直結する扉口はない)、横断面の翼廊3身廊は両サイドのファサードに達し、信徳と望徳と愛徳の対神徳を注釈する。このようにして、ゴシック大聖堂が中世にそうであったように、現代にふさわしい記念碑的な聖堂を形作る」¹⁵(傍点は訳者による強調)

この情報提供者は商業学校教授ジュアン・マルティ・マトリエウ Joan Martí

¹⁵ “Las conquistas del progreso y nuestro Templo”(Martí Matlleu), *El Pro* (Barcelona, 1 abril 1926), Año 60, N°7, pp.124-127

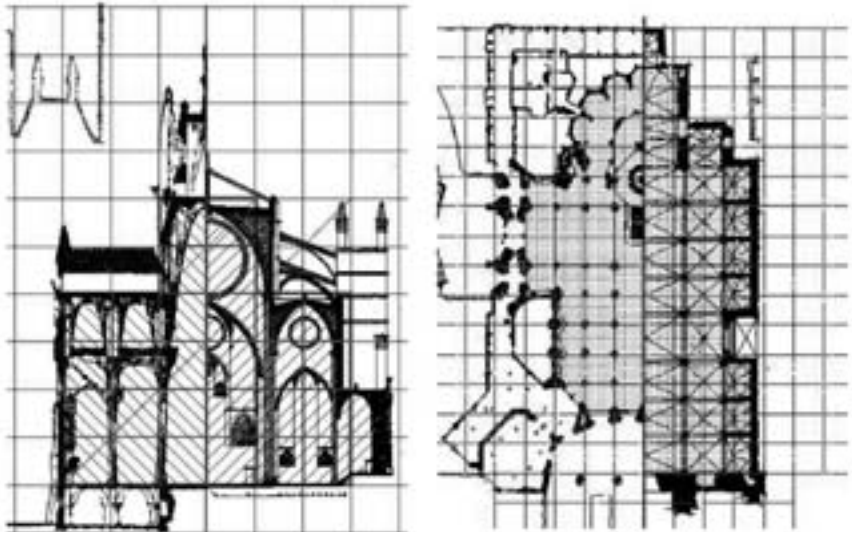


図 11 聖堂平面・断面図（1917年初公表）とマリョルカ大聖堂との比較図

Matlleu (1883-1946) であり、1914年に建設委員会の委員に就任し、1935年の解任まで機関誌の編集長の他、副書記と書記を歴任する。したがって、ガウディとは親密な関係にあり、こうした情報が入手可能になったのであろう。また、1915年に『聖堂アルバム』初版が出版されているから、1926年の時点ではその他の情報、例えば、大正面側の7秘跡に捧げられた扉口とか、翼廊での対神徳構成理念などは、重要ではあるが、十分に知られており、新知見に繋がるものではない。

カンピンス Pedro Juan Campins Barceló (1859-1915) 司教が大聖堂修復を目的としてガウディを初めて訪ねるのは1902年のことであり、1903年1月には前掲したマリョルカ通り陸橋の情報が公表されていることから、この設計変更は1902年のことになろう¹⁶。おそらくこの時、聖堂の収容能力拡充のため身廊部も三廊式から五廊式に設計変更されたに違いない。また、サグラダ・ファミリア (図9) とマリョルカ大聖堂 (図10) との比較図 (図11) を見れば明らかなように、両

¹⁶ 司教とガウディとの初めての見会は1901年8月19日、そして正式の修復依頼は翌1902年3月17日、同月26日には事前調査のためガウディはマリョルカを訪れる (Rotger Capllonch, M.: *Restauración de la Catedral de Mallorca*, Palma de Mallorca; Amengual y Muntaner, 1907, pp.45-46)

聖堂の幅・奥行き・高さが極めて近似していることに驚かされる。主身廊の高さは前者 45 m に対し、後者 43.74 m、側廊は 30 m に対し 30.17 m とほぼ同一。身廊幅は前者 $7.5 + 7.5 + 15 + 7.5 + 7.5 = 45$ m に対し、後者は $10.03 + 19.40 + 10.03 = 39.46$ m、これに側廊の祭室の奥行 6.7 m を加えると 46.16 m となり、類似した数字が得られる¹⁷。また、両者の等高式の一室空間的な空間構成もカタルーニャのゴシックの特徴を受け継ぐ共通性でもある。したがって、今回の計画変更がマリョルカ大聖堂の修復工事依頼に端を発していたという引用文の内容は信憑性のある情報であろうと判断される。

この最終案に向けての設計変更がなされた 1902 年は、ガウディにもそれなりの理由があった。1895 年、当時のバルセロナ司教カタラー卿は、創設者ブカベリーヤとその妻、さらには後継者たちの相次ぐ急死を受け、サグラダ・ファミリア聖堂の第一次建設委員会を設立した。そして 1899 年末、モルガーデス José Morgades y Gili (1826-1901) 卿が新司教の座に就くと、ガウディに聖堂の最終計画案を詳細な設計図にまとめることを命じた。しかし、締め切り期限が訪れる前の 1901 年 1 月 8 日、新司教は急逝した。カサーニャス Salvador Casañas i Pagès (1834-1908) 枢機卿が司教の座を後継すると、ガウディは面会を求め、懸案の計画案についての指示を仰ごうとしたのだが、次の質問で話の腰を折られることになる。

「あなたはサグラダ・ファミリア聖堂を愛していますか」

「はい枢機卿、その通りです」

とガウディが性急に答えると、

「そうですか、それで結構です。それ以上聞く必要はありません。今まで通り、建設を続けてください」

と言って、会話を終えてしまったのである¹⁸。すなわち、カサーニャス枢機卿はガウディに聖堂を一任したのだ。聖堂に対するこうした責任と義務感がガウディに今回の設計変更に導くための伏線になっていたのであろう。

¹⁷ Coll Tomás, Baltasar: *Mallorca Cathedral*, Palma de Mallorca, 1977, pp.38-39

¹⁸ “El Templo de la Sagrada Familia”, *Diario de Barcelona* (Barcelona, 19 enero 1915), Nº19, pp.833-36/ Martí Matlleu, J: “Historia de la Asociación josefina”, *La Hormiga de Oro* (Barcelona, 17 marzo 1923), Vol.15, Nº11, pp.43-44

6. 最大規模の聖堂計画案

これまでの聖堂計画の変遷でも明らかなように、ガウディの計画案は常に拡大傾向にあった。しかし、現在知られる最終案は最大規模のガウディ案ではない。実は、最大規模の聖堂平面図は1910年パリで開催されたガウディ展に展示されており、その平面輪郭図(図12-13)は1906年頃に作成された聖堂周辺の整備



図12 パリでのガウディ展、展示図面類、下部中央左に聖堂平面図(図13)



図13 聖堂平面図(前図拡大)

計画案(図14)でも使用されているのである。1906年と言えば、最終案に直結する外観完成予想図2種類が初公表された時期に一致する。これらの完成予想図では建設の拡大を示す陸橋の存在は大正面側のみで、背面側には認められない。最大規模の計画案とは正に背面側のプルベンサ通りにも陸橋を架け、聖堂を拡張するものであった(図15)。

1905年8月24日、バルセロナ市は国際コンペの受賞者レオン・ジョセ



図14 聖堂周辺計画(1906年頃)

リーに都市将来の道路整備実施計画を依頼した¹⁹。このフランスの建築家の要請に従い、ガウディは聖堂の周辺計画を8頂点の星形で計画した(図14)。この時の計画案は1907年出版の百科事典にこう説明されている。

「ジョセリー氏の計画案により、サグラダ・ファミリア聖堂は星形の巨大な広場の中央に位置することになろう。星形のそれぞれの頂点からは聖堂の美しさが眺められよう」²⁰

しかし、この計画案では周辺の土地買収に巨費を要するため、ガウディはもう一つの「サグラダ・ファミリア聖堂を通常の視線で眺められる最小限の距離と視点を示す図」にまとめ、4頂点の星形計画案(図16)を作った²¹。1907年12月12日に受理されたフランス人の最終案では、聖堂とサン・パブロ病院を結ぶ斜めの道路(現ガウディ通り)と聖堂周辺に半径98mの円形広場とが計画されていた²²。ガウディの前記2案(図14・16)は、この斜めの道路を描いていないから、いずれも1905年以降1907年以前に作成されたことになろう。なぜなら、現ガウディ通り(図18・19)は星形計画案の意図に合致するものであり、ガウディ計画案が1907年以後に描かれたとすれば、この通りが描かれて然るべきと考えられる

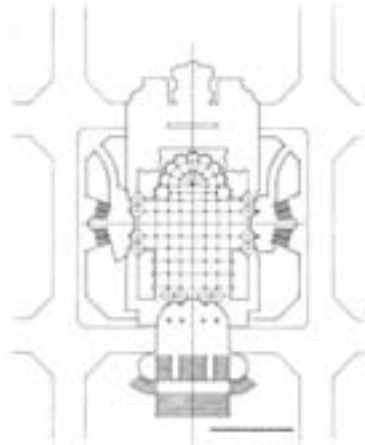


図15 聖堂平面図復元(論者による)

¹⁹ 将来のバルセロナ道路整備基本計画国際コンペは、1903年12月2日から1904年12月2日まで開催され、最終日翌日の12月3日に提出されたフランス人建築家レオン・ジョスリー Léon Jussely (1875-1932) の計画案が1905年4月27日に受賞する (*Diccionario enciclopédico hispano-americano de literatura, ciencias y artes*, “Barcelona” の項、Vol.26, Barcelona, 1907, p.229)。

²⁰ 前注の百科事典

²¹ Puig Boada, Isidre: *El Temple de la Sagrada Família*, Barcelona; Ed. Barcino, 1929, pp.21-22 / *El Temple de la Sagrada Família, síntesis del arte de Gaudí*, Barcelona; Ediciones Omega, 1952, p.22.

²² González Moreno-Navarro, Antonio, y Lacuesta Contreras, Raquel-Ruth: “Resumen histórico de la evolución del entorno urbano de la Sagrada Família”, *CAU* (Barcelona, noviembre/diciembre 1975), N°40, pp.20-44

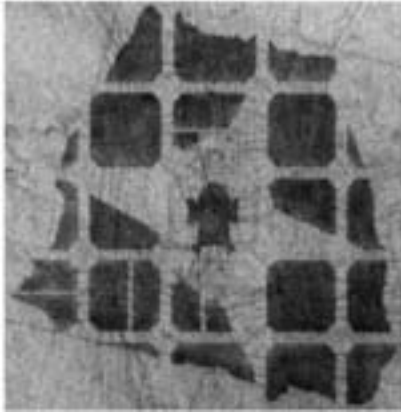


図 16 1906 年頃作成の 4 頂点案

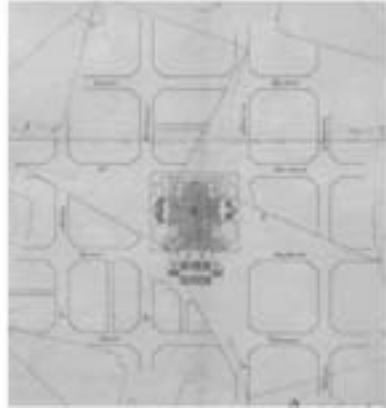


図 17 同左星形案、1916 年再製図



図 18 市当局作成「新計画」

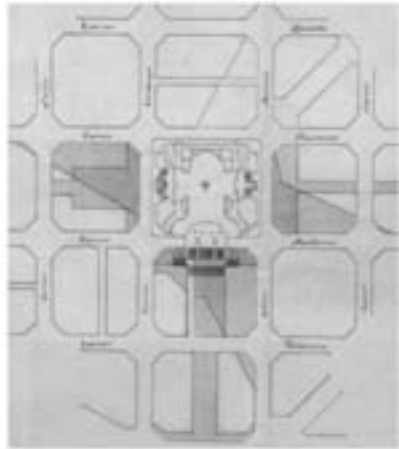


図 19 前 2 計画案の買収用地比較図

からである²³。

²³ Landecho, Luis de, 及び Repullés y Vegas, Enrique María: “Sección de Arquitectura, Informe sobre el expediente relativo al proyecto de ampliación y reforma del Plan de Ensanche de Barcelona, en la parte de San Martín de Provensals y San Andrés de Palomar”, *Boletín de la Real Academia de Bellas Artes de San Fernando* (Madrid, 1922.5.26), Época II, Vol.16, N°62, pp.75-105. 市当局の説明でも、現ガウディ通りの計画と星形広場の廃止とが連動するように述べられている (p.96)

これら2つの計画案(図14・16)には聖堂平面図の輪郭が描かれており、聖堂は大正面側のみならず、背面側でも隣接地に拡張されているのである²⁴。

他方、1910年のパリ・ガウディ展用に図面を描いた建築家ボルダスは次のように記す。

²⁴ これら2つの計画案原図は現存せず、唯一ジュアン・マタマラの遺品である4頂点案原図の写真によりその存在を確認することができる(図16)。同原図左肩には8頂点案スケッチ(図14)も描かれている。注6の古典書(Ráfols-1929)に掲載された4頂点の聖堂周辺計画案、および同案と市当局作成の「新計画案」との比較図(pp.222-23)の原図は新たに(2000年頃)バルセロナ市公文書館 Arxiu Municipal Administratiu de Barcelona で発見された。これらの図面は1916年に市当局により承認された新都市計画に対する異議申立書に添付された3図面(市当局による新計画、1906年頃に提案したガウディの4頂点星形案、前2者比較図)であり、そのひとつがラフス掲載の4頂点案に相当する。ただし、後者は新たに発見された同案原図(図17)の聖堂外観輪郭図4面に對し、倍の8面が描かれているが、日付もガウディのサインも見られない。これに對し、新たに発見された異議申立書には、すべての添付図面を含め、1916年10月の日付とガウディの署名が入る(カタログ: *Habla Gaudí, Barcelona*; Museu Diocesà de Barcelona, 2002, pp.13-15)。この4頂点星形案(図17)は「1916年10月」の日付を持つにもかかわらず、1906年頃に提案した「以前の案」として添付されていることから、現ガウディ通りは描かれていない。当然ながら、「新計画」を示す図(図18)とそれとの比較図(図19)には現ガウディ通りは描かれている。しかしながら、これら3図面に使用された聖堂平面図輪郭は背面側隣接地に拡張されておらず、1916年時点での平面図の輪郭が使用される。その結果、1905-07年の4頂点案と言いながら、1916年の同案聖堂背面側の広場形状が前案と相違する。その違いは背面側への拡張の有無に由来するのである(図16と図17を参照)。

市当局によるこの「新計画」でも大正面前の隣接街区に大階段用敷地が用意され、「降誕の正面」前の街区には通りに平行する広場が、「受難の正面」前の街区には大正面前と同じ通りに直行する広場が計画されたが、背面側街区には何も用意されなかった。

1916年「新計画」に対するガウディの異議申立は、この「新計画」の実現に要する用地買収面積が1905-07年の4頂点星形案に必要な用地面積よりも大きいことを比較図で証明し、4頂点案への変更を要請するものであった。また、この「新計画」は国の認可を必要とし、そのためには王立美術アカデミーの審査を受ける必要があった。この答申(1922年)では背面側街区にも広場を設け、聖堂を広場全体の中央に位置させることを推奨するが、用地買収費が高額になることから要請ではなく、助言にとどめる(前注の答申、p.100)。

以上のことから、1905-07年作成の聖堂周辺計画案においてのみ、聖堂平面は背面側にも拡張されているのであって、1916年の同計画案ではそれが見られないことに留意する必要がある。

²⁵ 建築家 Jeroni Martorell (1877-1951) はガウディのパトロン、アウセビ・グエイ Eusebi Güell (1846-1918) の命を受け、パリでのガウディ展の準備をする。当時、ボルダスはマルトゥレイの助手をしていた関係から、聖堂図面を描かされる羽目になった(次注参照)

「聖堂平面図を描く段になったとき、マルトウレイ（ジェロニ）²⁵と私は極めて当惑した。平面図を描くために必要なガウディの詳細図が一つもなかったからだ。『適当に描いておきなさい』とガウディは口癖のように言い、『パリに平面図は送らなくても構わない』とまで言った」²⁶

しかし、1910年初めに描かれたこの平面図はガウディ展に出品され、聖堂周辺計画の平面図と同じく、聖堂の前後に拡張されているものであった（図12・13）。また、1913年1月26日、新聞『カタルーニャ便』が1頁全面に聖堂特集を組み、完成予想図のみならず、これまででもっとも詳細な聖堂解説も掲載する。その内容からして、聖堂側が提供した文面であろうと推測される。『聖堂アルバム』初版用の原稿は1910年に着手されているから、おそらく、その原稿をベースにしたものに違いない²⁷。だとすれば、ガウディの考えが直接反映していると考えてしかるべきであり、その文中には次の内容が見られるのである。

「聖堂頭部後方のバシリカの外には、聖堂一般がそうであるように洗礼室が設けられ、これと一体化し、行列回廊の両コーナーにはバシリカの聖器室が設置されるであろう」²⁸

この記述に従うと、背面側の拡張部中央に洗礼室が、その両サイドに2つの聖器室が設けられることになるろう。

しかし、1915年サグラダ・ファミリア聖堂が初めて出版した解説書『聖堂アルバム』では、背面側街区の用地買収が困難になったらしく、その部分の記述は削除され、洗礼室は大正面脇の、向かって左側に移された。そして水の対概念として火が選ばれ、清めの水の洗礼室に対し、反対側には諫めの火の懺悔室が新設された。なおかつ、それぞれの大正面前の広場に水の噴水台と火の聖火台を設置するという着想が導き出された²⁹。それから2年後の1917年に聖堂平面図（図9）が初めて公表されてからは、サグラダ・ファミリア聖堂の基本構成は定着したと

²⁶ Bordas, Juan: “Al lado de Gaudí”, *La Publicitat* (Barcelona, 25 Junio 1926), Vol.47, N°16297, p.4

²⁷ “El Álbum del Templo”, *El Pro* (Barcelona, 1 septiembre 1915), Año 49, N°17, pp.280-01

²⁸ “Templo Expiatorio de la Sagrada Familia”, *El Correo Catalán* (Barcelona, 26 enero 1913), Año 38, p.6

²⁹ *Templo Expiatorio de la Sagrada Familia, Barcelona*, Barcelona; Herederos de la Vda. Pla, 1915

³⁰ “Planta del Templo y claustros”, *El Pro* (Barcelona, 1 Abril 1917), Vol.51, N°7, pp.120-21 / *Templo*

いえる³⁰。したがって、1905-07年の間にガウディは聖堂背面側への拡張を考え、1913-15年の間にその考えを断念したと推定できる。ただし1906年初め（1月と3月）に初公表された2つの聖堂完成予想図では背面側の拡張が描かれていないことから、背面側拡張案はそれ以降に考えられたと限定できそうにも思える。すなわち、この最大規模の計画案は最長、1906-1915年の間、ガウディに抱かれていた可能性がある。

前稿で検討したサグラダ・ファミリア聖堂最終案を構成する主要構成要素のうち、これまでの記述で現れていないものは、唯一、聖堂背面側の行列回廊中央に位置する聖母マリアの「被昇天の礼拝堂」だけである。この礼拝堂が初めて出現するのは、1923年に公表された聖堂平面図においてであったことは、前稿で見た通りである。

7. まとめ

西欧の大聖堂建設が数世紀にわたることは珍しいことではない。また、中世に建立されたスペインの大聖堂や修道院が頻繁に増築を繰り返す例も枚挙にいとまがない。こうした事例では、時代とともに建築様式が変化するため、一つの建築モニュメントに様々な様式が混在することになる。当然のことながら、増築を繰り返せば、初期の計画案とは相違することも一般化する。また、初期計画案の変更ということもしばしば見られる。例えば、ローマのサン・ピエトロ大聖堂はその好例であり、最初のブラマンテやミケランジェロのギリシャ十字の集中式プランからマルデナによる現在のラテン十字のバシリカ形式となり、ベルニーニによる大正面前の巨大な楕円形のコロネード広場が出現して現在の姿に落ち着く。またジローナ大聖堂（1312年着工）の場合、3廊式の聖堂頭部で着工されたにもかかわらず、単身廊に設計変更され、サン・ピエトロに次ぐ世界第二の身廊幅を持つ聖堂として完成する。こうしたことを可能にしたのは、一つには石造であること、もう一つは、現代の高層ビルや日本古来の木造建築のように、建築物全体を基礎から徐々に建ち上げるのではなく、建設の長期化を念頭に置き、祭壇側の聖堂

Expiatorio de la Sagrada Familia, Barcelona; Herederos de la Vda. Pla, 1917, 裏表紙。
この聖堂解説書は前注の第2版であり、テキストには変更は見られない。

頭部を最初に作り、できるだけ早く礼拝ができるよう部分ごとに完成させて行く建設方式にあらう。ガウディはこの建設方法を「水平方式」に対し、「垂直方式」と呼んでいた。

事実、サグラダ・ファミリアの場合、聖堂頭部の下部構造体である地下礼拝堂から着工され、わずか3年後の1885年、同礼拝堂の7つの放射状祭室中央の「サン・ホセ祭室」を完成させ、礼拝を可能にさせる。地下礼拝堂自身は構造的には1888年には完成していたが、礼拝が可能になるのは1890年頃のことであった。それに続き、上部構造の聖堂頭部外周壁を建設(1890-93)するものの、地下での典礼儀式が可能であることから、内陣を完成させることなく、「降誕の正面」(1893)の建設に進み、このファサードとこれに一体化する4鍾塔の建設に工事を集中させてきた。すなわち、この正面が着工された1893年の段階では聖堂頭部と翼廊の長さとは幅までは決定されていたが、それ以外の部分の計画は全く自由であったと言っても過言ではない。

とは言うものの、他の部分の計画案が存在しないことを意味するものではない。各段階でその時点での聖堂計画案が存在したからこそ、部分の建設が可能であったことも忘れてはならない。ただし、この聖堂の場合、財源不足から常々建設中断危機の状態にあったため、建設速度は極めて遅く、未着工部の詳細設計を急ぐ必要性は全くなかった。また、キリスト教聖堂は長い伝統を基にした雛形が用意されていた。ギリシャ十字、ラテン十字、バシリカ形式、集中式プラン、ドーム型聖堂などの用語はこうした雛形の名称でもある。しかも、ガウディが着任した時には、ラテン十字のバシリカ形式で着工されていた。この時点の建設部分を白紙に戻さない限り、聖堂計画の方向性は自ずと決まっていたと言える。すなわち、詳細設計まで終えた聖堂計画案は存在しなかったものの、ガウディは常に聖堂全体の計画案を持っていた、と考えるべきである。

本稿での平面計画の再検討により、その時々の計画案が存在し、それらが変遷していることが明確になった。セルダーによるバルセロナ拡張計画案(1860)では競馬場に予定されていた現在の建設地は、ロレートの聖堂規模に合致したからこそ購入されたのであろう。この敷地条件が初代建築家ピリヤール案に強い影響を及ぼした。敷地の5m程の高低差は大正面前に大階段の設置と身廊の長さの再検討を要請した。ガウディは着工されていた聖堂頭部と敷地条件を満足させ、バ

ルセロナ大聖堂を範にしながらも、自らの聖堂理念である行列用回廊を導入して最初の計画案（1885）を作成した。降誕のファサードの着工に際しては、初期の大作パラウ・グエイ（グエル館 1886-90）やテレサ学院（1888-90）を完成させ、アストルガ司教館（1889-93）とボティーネス館（1892-93）の建設中で、自己実現に着実に向かっている時と重なり、自らの聖堂理念である集中式プランの実現に向かった。1900年になると、「降誕の正面」の全貌が明らかになり始め、詩人マラガイは最初の聖堂賛歌『生まれつつある聖堂』を発表し、サグラダ・ファミリアはバルセロナ大聖堂と並び称されるモニュメントに変貌して行く。また、同年ガウディはカサ・カルベート（1898-1900）でバルセロナ市主催の第1回目の建築年間賞を受賞する。ガウディの天才・巨匠像が定着され始める1902年、マリョルカ大聖堂の修復依頼を契機に、聖堂計画は収容力拡大を目的として身廊部が拡張され、大正面前の大階段を隣接地に計画し、敷地条件を克服する。これを可能にしたのはサグラダ・ファミリア聖堂、特に「降誕の正面」の記念碑性とガウディの権威であったに違いない。だからこそ、市当局による敷地買収が合意されたのであろうし、1908年以降の都市計画では常に大階段用の敷地が用意されてきたのであろう。ガウディはさらに背面側隣接地にも聖堂を拡張する案を作成するのだが、これに関しては拡張の合理性が得られず、当局との合意には至ることなく、最終案の平面計画に落ち着くことになった。しかし最終案は、結局のところ、生きる者には不可避の死がさらなる展開をガウディに不可能とし、その時点で残された案であり、その結果、正にガウディの最終案になったものである。